



平成30年10月

モダンハンドボール 上半期総括

1. 目的

本年度の指導委員会・審判委員会共同で作成した審判員の目標である「コンタクトプレーを正しく見極める」（モダンハンドボール）について、審判委員会では、競技規則研究専門委員会を中心に、国内・国際の大会において、どのような成果、課題があるのかを見出し、本年度下期及び来年度につなげていくために上半期の総括を行った。

2. 審判員の立場から

① 審判員の成果、課題

○成果

- ・個々の審判員が、スピーディーなゲーム展開を目指しており、安易に笛を吹き、試合を中断するという場面が減少した（不必要な笛の減少）。
- ・影響を丁寧に見極めてから、判定しようとする審判員が増えた。
- ・警告なのか、直接の退場なのか、それ以上の罰則なのかを丁寧に見極めて、判定しようとする意識が高まってきた。

△課題

- ・モダンハンドボールが展開される国際大会においても、その判断基準（許容範囲）はまだ統一されていないように感じる（国際審判の意見から）。
- ・国内において、モダンハンドボールの考え方がうまく浸透されておらず、一試合を通して、あるいは一大会を通して、基準が統一されていない。
- ・基準が統一されていないため、チームやプレーヤーが戸惑う結果となっているのではないか。



- ・他の審判員から見てアドバイスをされる際に、担当した審判員が影響を見極めて判定（笛を吹く、吹かない、または罰則を適用する、しない）しているのか、そうでないかの区別がつきにくい。
- ・事実判定を正しく見極めることに精一杯である経験が少ない審判員（D級・C級）にとって、この考え方を浸透させるのは難しい。
- ・ゲームの流れを重視するがあまり、最終局面で罰則を適用すべきラフプレーがあったにもかかわらず、「得点が決まったからOK」「シュートを打ったからOK」ということを理由に、ラフプレーが判定されない（結果、ラフプレーを許してしまっている）。

② プレーヤーの成果、課題

○成果

- ・**国際大会**において、反則をされながらもシュートが決まれば、多くのプレーヤーはすぐに帰陣する。多少のアピールはあるものの、「ボディコントロールは失っていない」と説明すると納得するため、モダンハンドボールの考え方が浸透しているように感じる。
- ・**国際大会**において、試合中にレフェリーと、プレーヤーがコミュニケーションを取ることで、理解が広がっていると感じる。
- ・国内大会において、身体接触を躊躇せず行うプレーヤーが増えた。

△課題

- ・罰則を取られたくないためか、早い段階で接触をやめてしまうことがある（ハードとラフプレーの判断が審判員及びプレーヤーもはっきりしていないことが一因と考える）。
- ・国内大会では、モダンハンドボールの考え方が十分に浸透しないためか、プレーヤーが罰則を判定してもらおうとアピールしてくる場合もある。



③ コーチの成果、課題

○成果

- ・国際大会では、プレーヤーと同様、影響を見極めていると伝えることで、抗議としてアピールするわけではなく、コミュニケーションの範囲で対応することができる機会が増えた。
- ・国内大会においても、JHL、大学生のカテゴリーのトップチームスタッフは、コミュニケーションを取る中で、モダンハンドボールへの共通理解ができつつある。

△課題

- ・都道府県大会や地区、市区町村大会レベルでは、モダンハンドボールの考え方が十分に浸透しておらず、影響がないプレーに対しても罰則を出してほしいとアピールする場合がある。
- ・モダンハンドボールの考え方が上手く浸透していないチームからのアピールをコントロールするためには、罰則をあえて適用することも必要かもしれない（世界基準ではなく、日本に理解される基準として）。

④ カテゴリーにおける成果、課題

○成果

- ・社会人、大学生のカテゴリーは、身体接触を試みたハードプレーの場面が増えてきており、スピーディーでダイナミックな試合内容となるが多かった。

△課題

- ・全日本大会研修会でカテゴリーによっては、影響の度合い（強度とその影響度）が変わるので、シニアとユースでは罰則の適用も変わると話した。しかし、そういった考え方は、どれだけ浸透しているか不確かである。
- ・身体の発達段階やレベルの相違、地域的な相違を考慮すると、中学生や高校生のカテゴリーまで、モダンハンドボールを一律に適用するのは難しいかもしれない。
- ・アジア、世界での活躍のためには、プレーヤーに対し、モダンハンドボールの考え方を浸透させ、その判定基準で国内においてもプレーを経験してもらうことが理想である。しかし、プレーヤーの身体的な発達段階を考慮した場合、モダンハンドボールの考え方を、全カテゴリーでも適用は難しいのではないかと。

⑤ その他、モダンハンドボールに関すること

(IHFの求める「スピーディーなゲーム展開」を求めるにあたって)

○女子ジュニア世界選手権（2018年8月ポーランド）での指導内容

- ・レフェリーミーティングにおいて、イエローカードのクリップ（シーン）は話題にならなかった。基本的に2分間退場が判定の基準として指導された。

△課題

- ・罰則の適用について、オールド・スタイル（6枚のイエローカードを適用し、基準を示すという考え方が、未だに残っていること。後半にイエローカードは適用しないということを知らない審判員もいる。またチームによっては、このことが全く伝わっていない場合もある。
 - ・ピボットプレイヤーとディフェンスプレイヤーとの攻防について、審判員がコントロールできず、ラフプレーにつながる試合展開となる場合もある。
 - ・GKなしでの攻撃（6人 or 7人）の際のコートレフェリーの位置
世界大会で、ある審判員が交代のGKと接触する場面があった。この状況となった際、位置の交代を試みることなくコートレフェリーがベンチ側に位置を取っている場合が見受けられる。そのため、素早い選手交代を妨害する結果を招いている（結果的に妨害していなくても、しそうな場面が見受けられる）。
 - ・スピーディーなゲーム
 - a 「怪我をしたプレイヤーが倒れていた（ケガではないが倒れていることも含む）場合、速攻やクイックスローオフを中断させてはならない」という考え方が、チームに浸透していない（例え審判が、得点チャンスが消滅するまでその攻撃を認めていたとしても、チーム側からタイムアウトを要求してくる）。
 - b ゴールエリア内の床が汗でぬれた場合、安易にモップを入れてしまう場面がある。ゴールエリア内は、反対側で攻防が行われている際にモップで拭くことを原則とする。また、ボールの交換についても安易に受けてはならない。
- ※ 国際ハンドボール連盟（IHF）が指導しているこのことを、審判員にもチームにも再度周知する必要がある。



3. まとめ（今後の提案）

① 審判員の判定（判断）基準の統一のために

映像を用いて視覚的に理解を深めていく必要がある。また、伝達手段としての講習会・研修会の在り方を検討する必要がある。

② コーチ・プレーヤーへの理解のために

連盟、ブロック、都府県審判長によるチームスタッフやプレーヤーへの講習会の実施（年度当初、大会代表者会議等）。

試合中に審判員とコーチ・プレーヤーとのコミュニケーションによって伝えていく。

③ 適用範囲の検討

カテゴリーによるモダンハンドボールの適用の検討。

審判員のライセンスレベルによるモダンハンドボールの適用の検討。

④ スピードハンドボールために 安易に試合を中断しない。モップ、ボールチェンジ、負傷したプレーヤーへの対応など。

⑤ 強化委員会、指導委員会、審判委員会との連携を密にして、日本の目指す方向性について共通認識をさらに図る。



(公財) 日本ハンドボール協会 審判委員会

審判委員長 福島 亮一

競技規則研究委員長 池淵 智一